

自閉スペクトラム症のお子さんは 歯ぎしり癖が多い？

Tsuchiya *et al.* Bruxism associated with short sleep duration in children with autism spectrum disorder: The Japan Environment and Children's Study. *PLoS One*. 2024;19(12):e0313024. doi: [10.1371/journal.pone.0313024](https://doi.org/10.1371/journal.pone.0313024)



【はじめに】

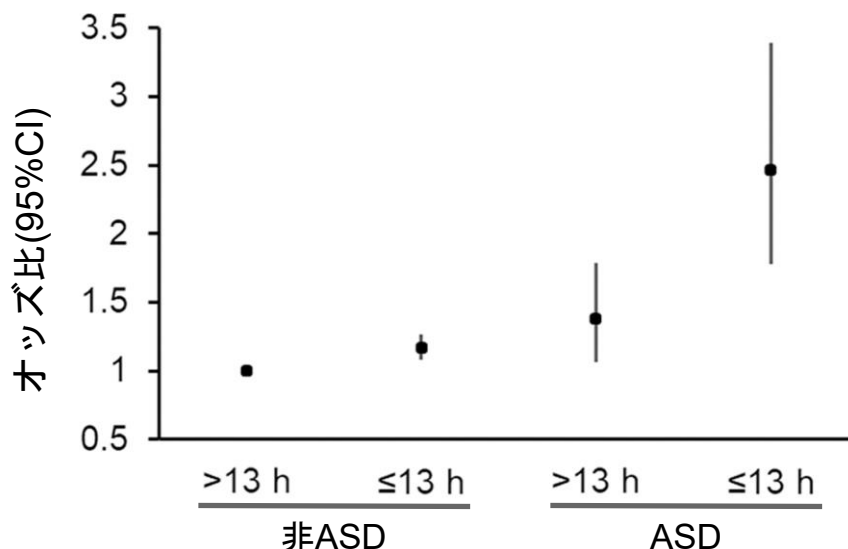
自閉スペクトラム症(ASD)児では、定型発達児よりも歯ぎしりが高頻度に見られます。ASDでは幼少期から睡眠障害をかかえていることが多く、また、これまでの研究では、歯ぎしりと睡眠障害の間に関連があることが示されています。そこで本研究では、幼児期の睡眠時間の短さがASD児における歯ぎしりの発生に関連しているかを検証しました。

【調査項目】

83,720人の子どもを解析の対象としました。歯ぎしりとASDの有無は、子どもが2歳から4歳までの時点で実施した保護者への質問に対する回答を用いて評価しました。また、子どもの毎日の睡眠時間は、生後1、6、12、18、36か月の時点における保護者への質問に対する回答から推定しました。これらのデータを用いた統計学的手法により、歯ぎしりとASDおよび睡眠時間との関連性を解析しました。

【結果】

ASDの有無および生後1か月齢時点での睡眠時間と歯ぎしりの起こりやすさの関連



グラフの縦軸の数字はオッズ比(OR:Odds Ratio)^{※1}を、エラーバーは95% CI^{※2}を示します。

※1 オッズ比：ある事象の起こりやすさを2つの群で比べたもので、数字が大きいほど事象が起こりやすいことを示します。この場合、事象は「歯ぎしり」を指します。

※2 95% CI：「同じ調査を100回繰り返したら、95回は真の平均値が含まれるだろう」という範囲です。この区間が狭いほど推定の精度が高いとされます。

歯ぎしりの起こりやすさは、13時間以上と比較して13時間以下の睡眠時間では非ASD群で1.17倍、ASD群で1.38倍に上昇しました。また、ASDと睡眠時間の短さとの間には統計学的に有意な関連が認められました。

【この調査でわかったこと】

新生児期の睡眠時間が短いことがASD児の歯ぎしりの発症と関連していることが分かりました。よって、新生児期に睡眠時間が短いことが、ASD児の歯ぎしり発症リスクの上昇に影響している可能性があります。この知見はASD児の歯ぎしり発症を予測し、事前予防措置をとるための貴重な情報となり得ます。